

SAP では6週間に渡って様々な実験、講義に参加致しました。この経験はいくつかの気づきをもたらし、気づきはいま良いことをもたらそうとしています。

学校ではなかなかできないような実験が目白押しの土曜日に好奇心はいつも敏感に反応しました。大学の環境を開いて実験や講義を行うことで授業時間、空間、設備による制約から好奇の高校生を解き放ちさらなる学びの場を与えて下さった、阪大の教授方の熱意には感謝の思いがあふれんばかりであります。熱血さはとどまることを知らず、コーヒープレイクも厳密には休憩時間となることはありませんでした。ある時は別室にてダイナミックな実験をたくさんしました。例えば、角運動量の概念を身体的経験を通して実感するためにペットボトルを両手に持ってコマの付いた盤上で回転するのです。またある時は眼を見張る実験、例えば、水力発電の基本原則を示す、水の入った2つの碗と放電する針を用いた実験に、参加者で皆で囲んで見入りました。白板の上で論じるのにとどまらずに実際的な活動の中で物理学と触れ合おうというのがSAPの方針だと私は段々理解していきました。最終日になると、手を動かし目を動かし身体をまた動かすSAPでのそれまでの経験を振り返って、それを物理学全体に敷衍してみて、どうも物理学というのは、現実の世界の現象ととことん向き合い、実験を通してそれとむずと取っ組み合うことで、それに関する説明を練り鍛えだしていこうという、泥臭い学問らしい、という気が起こりました。この感想は、授賞式での教授の方のお話を聞いて確信へと変化しました。

印象に残った講義は導電性ポリマーに関するものです。私はその後半部分のセレンディピティの講義に大いに心を打たれました。導電性ポリマーの発明は研究員の失敗にその端を発していたのです。世間でいう「失敗は成功のもと」というのは、失敗をした人がそののちにその対処に勤しむことが、次なる失敗を繰り返さないための彼自身の学習に繋がるのだというのが主意だと存じますが、それに対し当講義で紹介されたセレンディピティというのは、失敗を喜んで分析する態度が大発明につながるという積極的で発展的な教えなのでした。研究員のミスをもしろチャンスであると捉えた白川秀樹さんの精神こそが科学のエッセンスであるとの考え方は私の胸に深く刻まれました

実験を繰り返す泥臭さ、失敗を尊ぶ精神、それらはともに私がSAPで学んだ物理学、サイエンスの意外な側面であります。そこから導出される教訓はきっと人生を送る上でも応用ができるに違いありません。身に起こったことに真正面から向き合っ、いろいろ条件を変えて実際に挑戦してみて、うまくいかなかったらその原因をとことん分析してまたやってみて、予想を裏切る結果には手を打ってひととき大きく喝采して、それから人生の発明をできるぞと息巻くのです。これができると生きていることそのものが楽しくってしかたないに違いないのです。